

陸自駐屯地紹介シリーズ 第40回

豊かな自然に囲まれ 米子駐屯地

第8普通科連隊他

駐屯地シリーズ編纂委員会

はじめに

鳥取県は中国地方の日本海に面し、東は兵庫県、南は岡山県と広島県、西の県境は鳥根県に接し東西は約200km、南北は広いところで50km、狭いところで20kmの3千500平方キロの中に人口約60万人を擁する県である。地域は県庁所在地鳥取市を中心とする東部、倉吉市を中心とする中部、米子市を中心とする西部地区に分かれそれぞれに観光地、史跡を擁して栄えている。

因幡地方には目を見張る場所がある。南北約24km、東西16km、高低差約90メートルの鳥取砂丘である。朝、日本海からの夜通しの風に吹かれ続けて風紋を一新し、足跡一つ無い朝の砂丘は、正に天然の妙、鋭い美意識を持つ芸術家達の創作意欲を刺激して止まない美であろう。又、日が落ちて白く輝く砂丘とその上空高く輝く満月、其処に響く波の音は、この世の美を超えて、童話・童謡の世界に誘う美ではあるまいか。

米子市を中核とする県の西地域には、伯耆大山がある。米子市始め6町村他一部岡山県域に広がり、中国地方最高の1千729メートルの高さを誇って、登山ばかりでなく奈良時代の役行者に端を発する山岳信仰の風習が今なお色濃く伝えられている名山である。緩やかに流れる裾の姿は本場に美しい。伯耆富士と呼ばれる所以である。また米子市街近くに有名な皆生温泉がある。意外にも温泉発見は遠い昔のことではない。明治年間に漁師が発見して成長したが、現在は家族向けの健康的な保養地としての色彩を強めつつあるとのことである。

この米子には国立鳥取大学医学部もあり、米子城・境港などを抛り所とした長い間の経済活動が築き上げた繁栄がある。アクセス

羽田空港から約75分で米子空港につく。着陸直前になると窓から駐機場に

航空自衛隊輸送機が見える。この滑走路は航空自衛隊美保基地の滑走路でもあり、米子空港は、自衛隊、国土交通省共用の空港なのである。陸上自衛隊は米子空港から東へ約9km、海岸から程近く、J R米子駅のほぼ北にあたる米子市両三柳という所にある。

駐屯地広報室から広報室長の迎えを頂いていた。その説明を聞きながら部隊に向かう間、経路上の景色を見回した。駐屯地に至る道路両側には広い敷地を持ちながら低層の建物が並ぶ新興産業地帯特有の風景が続いている。交通量も穏やかな約25分の走行の後、駐屯地営門前に到着した。早速車を止めて正門からの風景を目に焼き付けた。正門の出入りは厳重で、車両の突入を防ぐ拒馬が置かれ、歩哨が入門車両を確かめた後に開かれるシステムになっている。左手に警衛所があり、戦闘服着用

着用の警衛隊が控えていた。警衛所前から走る道路の両側に何棟かの建物が並んでいる。その最初の右手に屋上に国旗が掲揚されている4階建ての隊舎がある。屋上高く風にはためく国旗の姿は、思わず拳手の敬礼をしたくなる懐かしさを感じる光景であった。この駐屯地は東西約700m、南北約300m、約20万平方メートルの地積を有し、広島第13旅団隷下の第8普通科連隊他が駐屯している。

駐屯地の歴史と変遷

この駐屯地には陸軍時代の歴史はない。資料によれば、大正12年に始まり陸軍省から通信省に委託された航空操縦士養成がこの地で開始されたことがこの駐屯地の始まりである。その後東京(京城)新島の航空路上の燃料補給基地として米子飛行場が設立された。昭和16年になると航空局乗員養成所となり戦況の悪化に従い特別攻撃隊の訓練飛行場として、そして昭和20年4月には海軍航空隊の基地となった。終戦後米軍に接収されたが、昭和25年警察予備隊の発足直後に返還された。

駐屯当初から現在に至る部隊編成の概要について述べてみたい。

・昭和25年12月〜26年4月
返還されると警察予備隊普通科第8連隊第3大隊が舞鶴から移駐してきた。

・昭和26年4月〜27年1月
この期間、駐屯地司令は同じく普通科第8連隊第3大隊長兼務は変わりなかったが、駐屯地管理業務処理を任務とする管理隊及び会計業務を処理する第200仮会計隊分遣隊が創設された。

・昭和27年1月〜29年6月
この期間改編の特色は、27年10月に警察予備隊は保安隊と名称を変え、同時に中心地機能に必要な業務隊が新編された事である。まず27年1月に普通

科第8連隊第3大隊は普通科第7連隊第2大隊と部隊名を変え、27年10月に保安隊が発足し、第33駐屯地会計隊米子分遣隊、中部方面通信所米子支所、第40警務大隊第3警務中隊米子分遣隊が創設され、29年1月には米子駐屯地業務隊が発足している。

・昭和29年7月～30年9月

昭和29年7月に保安隊は自衛隊と名称をかえ、部隊の名称等が変更された。先ず部隊名は第7普通科連隊第2大隊と名前を変え、支援部隊は米子駐屯地業務隊、第333固定無線隊、第356会計隊、第336警務分遣隊の陣容となった。

・昭和30年10月～37年1月

部隊改編により駐屯主動部隊は第8普通科連隊第3大隊と名称を変え、支援部隊の内、第333固定無線中隊は第333基地通信隊、第336警務分遣隊は第336警務隊と名称を変えた。

・昭和37年1月

陸上自衛隊第13師団発足に伴う部隊改編により、駐屯主動部隊は第8普通科連隊(海田市より移駐)となり駐屯地司令が従来の2等陸佐から1等陸佐の第8普通科連隊長が兼ねることとなった。主動部隊は第8普通科連隊隷下の本部管理中隊、第1普通科中隊、第4普通科中隊、重迫撃砲中隊、支援部隊は米子駐屯地業務、第312基地通信中隊米子派遣隊、第356会計隊、第116地

区警務隊米子派遣隊という陣容となったのである。その後連隊内各普通科中隊の対戦車戦力、装甲機動戦力、迫撃砲戦力の向上見直しによる編成・改編を経て第13旅団(旅団司令部は広島県海田市駐屯地)隷下、機動力に特色ある普通科連隊として現在に至っている。

戦果は赫々として

本部隊舎玄関に足を踏み入れた途端目を見張る陳列ケースがあった。中部方面隊徒手格闘競技会の優勝旗、旅団銃剣道競技会、旅団持続走競技会、旅団重迫撃砲競技会の優勝旗と優勝看板その他過去の優勝記念の楯等が陳列されているのである。陸上自衛隊では師団・旅団の競技会に於いては優勝の印として賞状に加えて、毎年持ち回りの優勝旗と看板が授与されるのが一般的である。看板について若干補足すると多くの場合駐屯地正門に掲げられた部隊目標程の大きさの杉の柁目材等が用いられ、墨痕鮮やかに「優勝」の文字が書かれている。これらは単なる賞品ではない。その種目について師団・旅団の最精鋭であることを認め、部隊指揮官、隊員一同が目標達成の印として、特に旅団銃剣道競技会の優勝看板と優勝旗には記憶があった。今年3月海田市駐屯地取材の当日が競技会の日であった。そこで第8普通科連隊は19年

ぶりの悲願を果たし優勝したのである。そのおり閉会式後優勝に沸き立つ一団に近づき指揮官にインタビュをされた。従って初対面ではない。優勝部隊指揮官の笑顔と記念写真撮影の態勢を取って指揮官を待ち受ける部下隊員のこの上なく和気藹々としていた歓声が記憶に残っていた。思った事が二つあった。「勝利に導くノウ・ハウはなにか」「他の部隊の追い上げが厳しいだろうな」。

このシリーズ取材を重ねる過程で多くの指揮官に時間を取って頂きインタビューをする機会があったが、その度に感じたことがあった。「駐屯地司令の統率哲学に踏み込んで記事を書いてみたい」。だがこれは記事として極めて危険な要素をもっている。一方的な見方に偏してはならないことは勿論、提灯持ちの品のない記述を重ねてしまふことは書き手ばかりでなく叙述される人物の人格にも誤ったレッテルを貼る危険性があるからである。それ故に今まで躊躇していた。今回はその危険性を承知の上で取って挑戦してみたい。

駐屯地司令インタビュ

競技会勝利への統率

駐屯地司令の出水田正志連隊長にインタビュ挨拶の後、冒頭の質問は「成功を得たノウ・ハウは企業秘密ですか?」。回答を断られた時の気まず

さも回避するための軽口での質問であったが、意外にも真剣な表情で回答が返ってきた。

「何も秘密はありません。すべて公開しますよ。皆がやっている事をしたまでの事です。……ただ誰がやっても同じ結果が得られるとは限りませんが……」。強烈な自信が窺えた。

先ず、連隊長は連隊代表チームの錬成訓練に顔を出すことに努めているようだ。幕僚、隷下各中隊長は連隊長に倣い、折りにふれて錬成訓練の場に出して中隊から選抜された要員に対して暖かい、時には厳しい叱咤激励の声をかけるはず、選手達にとっては所属部隊長の目の前で励むことはこの上ない激励である。

この春選手一同から連隊長に贈られた品がある。銃剣道防具の前垂れであり連隊長の名前が刺繍されている。それを付けて選抜選手と稽古に励む写真があった。

一つの風景を思い浮かべて欲しい。チームの選手構成には1任期未満の隊員を2名含めなければならぬ。彼らは多くの場合銃剣道の素人である。元太刀に立つ連隊長にただ猛然と襲いかかるはずである。連隊長は経験が有るという。しかし若者相手に徹底的に勝って意気消沈させることも、アメをしゃぶらせて増長させるのも目的から

大きく外れる。勝利に繋がる正しい刺突を経験させ、最後まで攻勢を振るい続ける気力を植え付け、激しい稽古の最後には肩を抱いて激励し、連隊の為に全力を尽くす戦意を育成してこそ意義がある。「君には一本やられたな」稽古が終わった後連隊長からかけられるとしたら若い隊員には終生忘れられない感激の言葉となる。そのとき汗を拭う連隊長の左脇の下などに、若い隊員の無茶苦茶な刺突を受けた跡の痣を想像するのである。

また連隊長は勝つため連隊隊員全員にどの様な役割を与えるかを考えている事が窺えた。応援、訓練支援など連隊が一体になるための方策に手を打った。その顕著な例がある。旅団銃剣道競技会に際しては、応援団長が連隊長から指名された。某中隊の3等陸曹である。指名の理由は「明るい」からであった。「君に連隊の応援を仕切らせる」といわれ責任の重さに身震いしたに違いない。なにしろ階級に拘わらず連隊全員の応援リーダーを任せられ力を振るう機会を与えられたのである。応援団長は身を粉にするだけでなく知恵も絞った。試合に臨む選手達はウォーミングアップを充分に取って丁度試合対戦の時刻に心・技・体共に最高の状態に昂めるためには朝4時頃の練習開始が必要である。米子駐屯地での練習

の段階から本番通りの時間に合わせて行われていたが、なんと連隊の応援団も同一時に起床し練習追い込みの代表選手を体育館で応援していたとのことである。その応援開始で効果的な手だてがあった。試合開始前に他部隊に先んじて声高らかに連隊歌を歌ったのである。選手団・応援団共に意気が上がると共に、自分たちの部隊に対する愛情が高まったと連隊長は話された。他の部隊は或いは「しまった」と思ったかも知れない。出だしの応援でリードを許してしまったと考えたのではなからうか。

部隊対抗競技会で勝つことは、とりも直さず「自分たちの部隊に対する誇りと愛情を高める機会」であり、間違いない統率発露の一場面である。

競技会勝利から更に統率をすすめて競技会勝利は確かに難しい。又価値がある。連隊長が如何に控えめに話をしつづけようと勝利の目標達成に向けて指揮下部隊を一丸とさせる統率の妙は感嘆せざるを得ないものであった。しかしながら、なにか語り尽くされていないものがあるような心の引っかかりがあった。そして話題を自衛隊の基本任務の一つ「災害派遣」に目を転じた時求めるものを探り当てた。任務にあたって下す「所命必遂」とその訓辞に見事に応えた実例である。平成20年

5月28日のことである。鳥取県中部の三徳山で2名の登山者が行方不明になった。当初県警と消防が出動して捜索に当たったが発見に至らず県知事は自衛隊に出動を要請していた。これを受けて連隊長は出動部隊に命令下達式を行い訓辞したという。「絶対に探し出せ」。筆者は連隊長の激励の言葉に勝手に言葉を加えて解釈していた。「警察も、消防も及ばなかった任務である。自衛隊が果たせなければ後はない。だから絶対に探し出せ」

災害現場に夕刻到着した部隊は、翌日捜索活動を確認するために現場を確認した。実はその場で或る2等陸曹が遭難者を発見したのである。誰に命じられた訳でも無いが険しい岩山の陰を確認していた時の事であった。残念ながら遭難者は息絶えていた。だがこの事について、部隊挙げて絶対探し出すと云う覚悟が、現場指揮官ばかりでなく出動隊員全員の現場確認に結びつき一人一人が目となって捜索現場をなめ尽くした。その結果が発見となったのである。

筆者は考えた。「連隊長は災害派遣の場面では、厳しく所命必遂を命じている。隊員はこれを絶対の任務として行動し、残念ながら生存救出ではなかったが結果をだした。これこそ統率発露の証ではないか」。更に考えた。

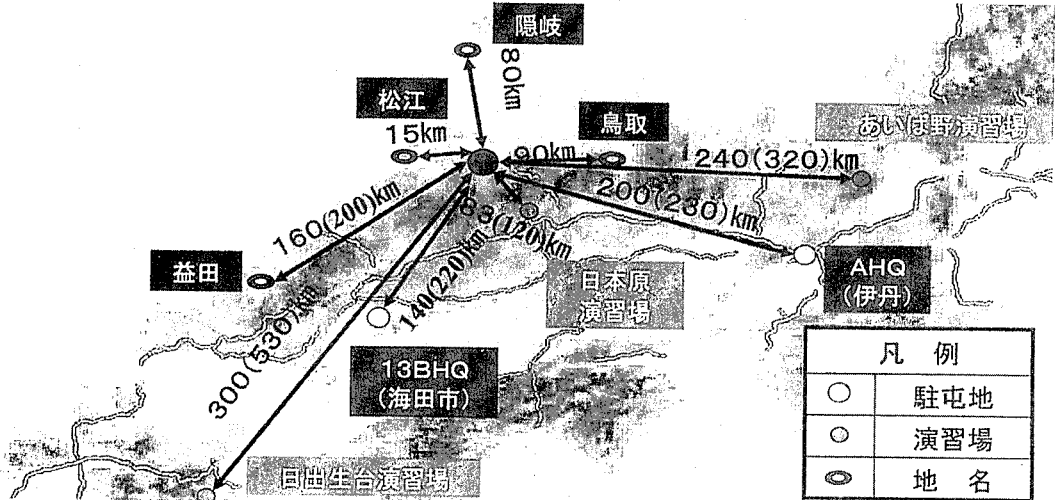
この駐屯地発足以来、水害、豪雪、山林火災、地震災害などに多くの隊員が出動して地域内外の国民の為に活躍した災害派遣の歴史がある。その積み重ねが「所命必遂」の気風として確立されているのであろう。

ここまでくると最も厳しい自衛隊の任務遂行の場面、「防衛出動」に備えた統率に及んで見えたくなつたが慎重事にした。それは実に隊員諸官に「身の危険を顧みる事なく任務に邁進する覚悟」を要望する、言い換えれば「命を捧げる」事を要望することだからである。既に外野の観客となり果てた者が軽々に筆にすべき事ではなく現役隊員の方々が自ら決めることだという考えをもっている。しかしながら現役隊員方は、多くの危険な海外派遣で国内ばかりでなく外国からも賞賛される成果を挙げたではないか。なにを今更心を煩わすことがあるうか。

連隊長の言葉の端に「今私たちは防衛出動に備えて全知全能を絞り切っている」との言葉を感ぜ取って居たのである。鳥取の地理的位置と駐屯部隊勢力からして今後の道は容易ではなからう。連隊長が益々統率の実を挙げられる事を祈りたい。

現に今年度訓練検閲は6月豊田野の演習場で受閲したが、評価は「優良」、又検閲開始前の隊容検査(軍装検査)

米子駐屯地と関連部隊等

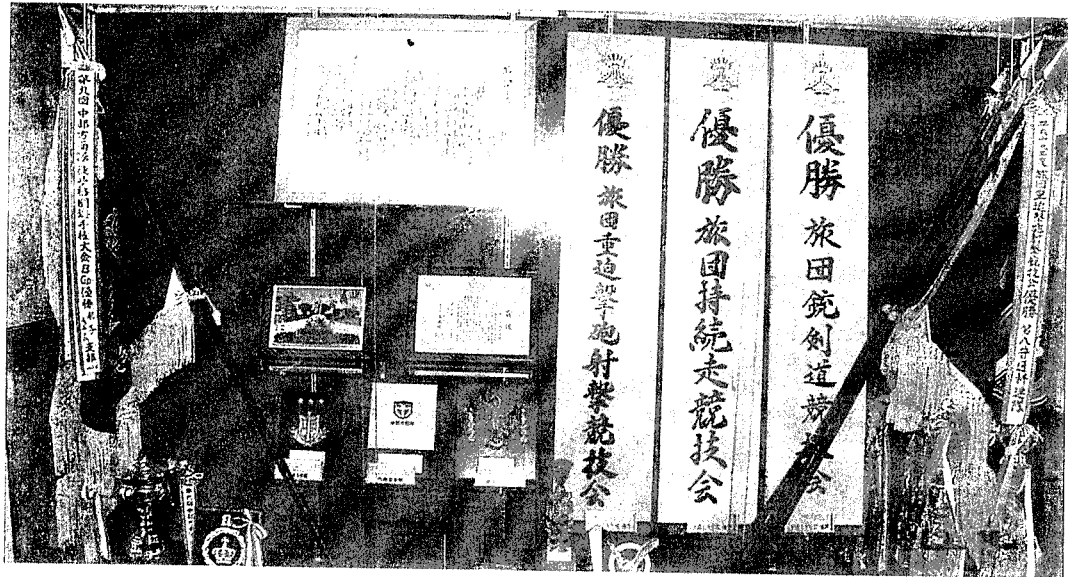
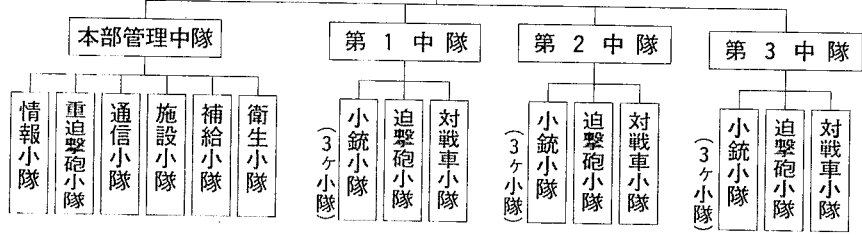


第8普通科連隊の任務・編成

連 隊 長
副 連 隊 長

- 山陰地区の防衛・警備任務
- 鳥取県に対する災害派遣を担当
- 大規模災害への増員
- 国際平和協力活動への参加

- 連隊本部
- 第1科 (人事・総務)
 - 第2科 (情報)
 - 第3科 (運用・教育訓練)
 - 第4科 (後方)



で検閲官第13旅団長を感嘆させたとい
う。最後に質問した。「部下の曹士で、
今心に残っている者がいたら教えて下
さい」。回答は瞬時に返ってきた。「沢
山おり過ぎて……困りましたね……」。
その姿に日頃から部下を信頼し愛情を
持つて見ている指揮官の統率の基本の
心を感じ取った。

駐屯地の日課

ここで駐屯地における日課時間につ
いて紹介したい。陸軍時代、或いは自
衛隊草創期と比較してみて頂きたい。

起床 6時 起床後日朝点呼
その後清掃、洗濯等

朝食 06時15分
朝食後清掃ベッドメイキング、
間稽古実施等あり

課業整理 07時50分
国旗掲揚・朝礼 08時00分

午前課業終了 12時00分
昼食 12時00分〜40分

午後課業整理 12時55分
課業終了終礼 17時00分

班長服務指導 17時00分〜30分
夕食・入浴 17時30分〜20時00分

自由時間
日夕点呼 22時40分
消灯 23時00分

右に掲げた日課時間は駐屯地内の日
課であり、訓練で演習場にある時はそ
れぞれの行動にもなつて変化するの

は勿論である。また自由時間の使い方
は千差万別である。洗濯、靴磨き等身
の回りの整理整頓をすること、ただ
ゆつくりと音楽等を楽しむこと、厚生
センターでフィットネストレーニン
グ、読書等を楽しむこと、クラブ活動
で武道・スポーツに励み或いは趣味を
楽しむこと、将来に備えて資格試験の
勉学に励むこと等々、それぞれに自由
に時間を過ごしている。

外出は、応急出勤に必要な人員確保
を勘案して、自由に許可されている。
普通外出はその日24時までの帰隊、特
別外出は翌日課業開始までの帰隊とな
つており日数を要する場合は休暇を
申請することとなっている。自衛隊草
創期、或いは陸軍時代と大きく差があ
るのは、独身隊員でも一定の階級、勤
務年限を超えた者に対して営外居住が
許可されることである。多くの場合営
外居住者用官舎に入居が可能である。

暖かい支え
自衛隊草創期、即ち警察予備隊が要
員確保に奔走していた頃の人物がその
まま現在にタイムスリップして部隊の
記念日等を見たとき、恐らく信じられ
ない思いをするはずの事がある。かつ
て「アメリカの傭兵」「税金泥棒」と
罵声を浴びせられていた時があった。
それが現在には多くの団体が堂々と競う
ように陸・海・空部隊の行事に支援を

寄せてくれているのである。協力団体
の名前と設立年月を列挙して見たい。
鳥取県隊友会 昭和31年2月
鳥取県防衛協会 昭和31年10月
米子駐屯部隊協力会 同42年11月
鳥取県自衛隊父兄会 同44年5月
鳥取県防衛協会女性部 同46年10月
鳥取県自衛隊退職者雇用協議会
鳥取県婦人防衛協力会

いずれも平成5年4月
鳥取県防衛協会東部青年部会 平成11年10月
鳥取県防衛協会青年部連合会 平成12年4月
鳥取県防衛協会中部青年部会 平成13年10月

これら協力団体において活動された
方々の動機を考えた時、底流に古い日
本への愛憎即ち帝国陸軍、帝国海軍へ
の懐古の心を感じ取るのである。鳥取
県には美保海軍航空基地等があり、其
処から特別攻撃隊が出撃して海に散
り、又鳥取市を編成地とする幾つもの
聯隊があった。
その聯隊の中で歩兵第40聯隊は明治
31年に軍旗を拝受し日露戦争、満州事
変、支那事変に従軍し戦績を飾ってい
たこと、また昭和18年7月、その第3
大隊がサイパン島で玉砕したこともあ
り、特に県民の鎮魂の思いが強かった。
実は昭和15年8月21日、南満州錦州に

永久駐屯することとなり既に鳥取部隊
ではなくなっていたが、鳥取県郷土部
隊としての長い歴史故に戦後に於いて
も郷土部隊として尊崇と鎮魂の祈りが
捧げられた。そして昭和56年3月31日
散華した郷土部隊英霊への餞として刊
行された『鳥取聯隊写真集』（靖國偕
行文庫所蔵）の巻頭に収録されている。
終わりに

今日、侵攻様相の多様化に感じ、全
国それぞれの地域で国土防衛の態勢が
整えられつつあり、山陰地方には山陰
地方の特色ある防衛準備が進められて
いる。任務遂行に万全の態勢を築きあ
げる事を祈りたい。

最後に今回は連隊長の統率に焦点を
当てた事について此が申し述べたい。
幾たびか取材を進める間に部隊指揮官
が、如何に統率に腐心しているか痛い
ほど感じていた。方々は断じて自らの
自己宣伝をしているのではない。それ
を承知しながら取上げて取り上げたの
は、「如何に統率に取り組んでいるの
か」ということを偕行社会員が知るべ
き時が来たような気がしておこがまし
くも、石を投じたのである。ご叱正を
賜りたい。

多忙な時期に拘わらず連隊長直々に
対応頂き、広報室ご一同にお手を煩わ
せた事に心から御礼申し上げます。
文責 松村興延 陸自64